

# アメリカ女性作家と優生学思想

—ハナ・ウェブスター・フォスターからジーン・ウェブスターまで

佐々木 真理

## 1. はじめに

19世紀末から20世紀初頭にかけて、イラストレーターのチャールズ・ダナ・ギブソン（Charles Dana Gibson 1867-1944）が描いた女性たちの姿は、いわゆるギブソン・ガールと呼ばれ、当時の理想的な女性像を表したものとして知られている。街角や海辺で澆刺とした美しさを披露する彼女たちは、南北戦争以降、アメリカに相次いで創設された女子大学による高等教育の普及、女性参政権運動の拡大といった、アメリカ社会における女性を取り巻く環境の変化の象徴でもあった。動きやすくなった服装をまとい、活動の場を家庭の外へ広げていく女性たちの姿は、新しい女性たちの生き方とより良き未来を祝福するかのようであった。さらに、“Picturesque America”という一枚のイラストのタイトルが示すように（Gibson 92）、その姿は女性たちだけではなく、アメリカ合衆国そのものの力や可能性を誇示する役割をも果たした<sup>1</sup>。

だが、均質化された身体的特徴を備えた彼女たちの姿は、新しい女性たちのあり方が限定的なものであることをも露呈する。ギブソン・ガールの白い肌は、彼女たちが白人の女性であることを、流行の先端を行く服装は中産階級以上に属することを表し、そして、豊かで健康そのものの身体は、母となりうる未来を暗示する。新しい女性の誕生が謳われてはいたものの、そこには人種や階級といった要素が立ちふさがり、個々人の願望や選択の自由が許容されるにはいまだ程遠かったのである。

新しい女性の自由と独立を賞賛しつつも、従来女性像から大きく逸脱することのないギブソン・ガールのこのような二面性は、そのまま第一次女性運動が内包せざるを得なかった問題へとつながっていく。19世紀後半から20世紀初頭の女子教育や女性運動が目指したのは、白人中上流階級の女性が母として妻としてより良く生きていくための環境を整えるという、きわめて制限された到達点であった。そこでは、人種や階級による差異も、個々人の願望や選択も抑圧され、解決されることはなかったのだ。言うまでもなく、そのような抑圧に対する反省が、20世紀後半から現代にいたる、第二次以降の女性運動を揺り動

かすことになる。

では、いったいなぜ、19世紀後半から20世紀初頭にかけて、さまざまな改革運動が起こり、女性たちを取り巻く環境も大きく変化する中で、ギブソン・ガールは二面性を保持し続けたのだろうか。その大きな要因の一つを示唆する一枚のイラストがある。ウォルター・ティトルが雑誌*Life* 1913年4月10日号の表紙として描いたものだ（Patterson 35）。“Evolution”というタイトルのこのイラストでは、典型的なギブソン・ガールが肩に一匹の猿をのせ、上半身を突き出すようにしながら挑発的な眼差しでこちらを見つめている。一匹の猿から進化を果たした人類の“the pinnacle of evolutionary accomplishment”（Patterson 34）としてギブソン・ガールを強調する構図から見えてくるのは、当時、アメリカ社会の改革や風潮を大きく左右した優生学思想の影響だ。

優生学（eugenics）<sup>2</sup>という用語を考えだしたのは、イギリスの統計学者フランシス・J・ゴルトン（Francis J. Galton 1822-1911）であった。チャールズ・ダーウィンのいともどこでもあったゴルトンは、ダーウィンの研究に感化され、ヒトの遺伝を操作することで人類を改良し進化させる必要性を説いた<sup>3</sup>。このようなゴルトンの思想の背景には、ダーウィンの進化論は言うまでもなく、適者生存を唱えたハーバート・スペンサー（Herbert Spencer 1820-1903）による社会進化論の影響がある。ゴルトン自身の思想は、今では“positive eugenics”として知られ、生物学的に貢献する結婚を促進し、法律で義務付けるといったものだった（Black 18）。その際には、政府が住居や衛生環境、教育を積極的に支援するべきとされた。一方で、20世紀に入ると次第に特定の人種の絶滅を唱えるまでに変貌していく“negative eugenics”では、生物学的に不相当とする未来の世代を一掃する必要がある、そうして初めて人種——白人種の遺伝的な運命をまっとうできるとし、国外追放、結婚の禁止、強制断種、受動的安楽死といった方法が正当化されるようになっていく（Black 19）。

ヨーロッパで生まれた優生学思想は、19世紀終わりにはアメリカ社会においても広く浸透していった。そもそも、エドウィン・ブラックによれば、優生学思想が伝わるはるか以前から、ネイティブ・アメリカンの虐殺、奴隷制度といった歴史を持つアメリカ合衆国はこの思想を受け入れる素地が整っていた。特に、19世紀後半の奴隷解放やヨーロッパからの移民の流入は、アメリカ社会のマジョリティであった白人たちに多大な不安を引き起こした。社会改革を訴えた革新主義者たちが、犯罪や貧困の要因に遺伝的な欠陥を見出し、その発想が人種差別主義や民族嫌悪とつながった時、より良いアメリカ人を選別し育てることが、従来のアメリカ社会を維持し発展させることにつながると考えられるようになるには時間はかからなかった<sup>4</sup>。

健康な身体を誇示する白人女性のギブソン・ガールは、優生学的に見て、最適な進化を遂げ、アメリカ社会を未来へとつないでいくにふさわしい存在であった。注目すべきは、実はギブソン・ガールの身体が帯びたこのような特徴は、決して19世紀後半に生まれたものではないということだ。確かに、南北戦争以前やあるいはそれ以前の時代の女性たちと比較するならば、彼女たちは自由と独立を獲得しているように見える。だが、健全な身体を持つ女性が健全な子供を産み育て、それによって国家が発展しアメリカ社会の安寧が保たれるという理想は、建国初期のアメリカから受け継がれてきたものであった<sup>5</sup>。優れた妻として母として女性が生きていくことを重視する——第一次女性運動の発展と成功には、この理想を巧みに運動へ取り込んだスーザン・アンソニー（Susan Anthony 1820-1906）に代表される活動家たちの戦略が大きく寄与していたが、だからこそ、この理想はそのあとの女性の運動や活動をさらに縛ることになってしまうのである。

共和国時代から20世紀にいたるまで、ギブソン・ガールは、姿かたちを変えながらも、実は本質的には変化することなく、さまざまな女性作家たちの作品に登場していた。母として妻としての女性の成長と教養の修得は、共和国時代から続くアメリカの理想であり、感傷小説や家庭小説に代表される、女性作家の作品が一つの大きなテーマとして描いてきたものだ。キリスト教的倫理観と結びついた女性の理想像は、19世紀半ばから女性の経済的な独立や自由の獲得といった目標を取り込んでいくが、母として妻としての身体的、精神的健全さと正常さの要求は、20世紀に入っても変わることがなかった。本稿では、女性作家の作品の変遷を踏まえつつ、優生学というアメリカ社会を動かした大きな思想が、どのように従来の女性の理想と結びつき、19世紀後半から20世紀初頭の作品に取り込まれていったのかについて検証を試みる。女性の社会的地位や生き方が大きく変わった時代にあって、作中で描かれる女性たちに優生学はどのような影を落としたのだろうか。

## 2. 18世紀から19世紀のギブソン・ガールたち

18世紀末から19世紀中ごろにかけて出版された女性たちによる作品は、ハナ・ウェブスター・フォスター（Hanna Webster Foster 1759-1840）の『コケット——あるいはエライザ・ウォートンの物語』（*The Coquette; Or, the History of Eliza Wharton; A Novel; Founded on Fact* 1797）に始まり、共和国の母としての女性のあり方を、女性の読者に対して広く教育する役目を担うものであった。家族や友人たちの度重なる忠告にもかかわらず、適切な男性と結婚し家庭を築く道を

選ばず、悲惨な末路を迎えるヒロイン、エライザの姿は、女性たちに生きるべき道や振る舞いを教え諭す目的があった。

もちろん、エライザ・ウォートンの姿に、当時の社会的規範を攪乱する要素を見出すことは可能だ。だが、共和国アメリカの未来を担う、健全な子供を産み育てるという女性の役割は、エライザの友人がエライザを教え諭す手紙において、以下のように強調されている。

I write warmly on the subject; for it is a subject in which I think the honor and happiness of my sex concerned. I wish they would more generally espouse their own cause. It would conduce to the public weal, and to their personal respectability. I rejoice, heartily, that you have had resolution to resist his allurements, to detect and repel his artifices. (154)

一人の女性の選択や結婚が“the public weal”につながるという考えには、共和国時代のアメリカにおいて、私的な領域である家庭が、公的な領域である国家のアナロジーともなっていたことが大きく関わっている（田辺 249）。アメリカという国を発展させるためには、その縮小版である家庭においても共和国理念が正しく受け継がれ、未来の国を背負う健全な精神と身体を備えた子供たちが育っていかなければならない。エライザの末路が暗示するように、理念を受け継ぐことができなかった女性は子供を持つことは許されないのだ。健全で正常とされる精神と身体を備えた女性だけが、子供を持ち育てていく社会——まさにここには、未来の優生学思想を受け入れる土壌があった。

このような流れが変化するかに見えたのが、女性参政権運動が広がり、相次ぐ女性のための高等教育機関の創立を迎えた南北戦争後のことだ。この時代に活躍した代表的な女性作家の一人であるルイザ・メイ・オールcott（Louisa May Alcott 1832-1888）は、『若草物語』（*Little Women* 1868）において、ギブソン・ガールの先駆けとなるような女性を登場させた。その女性、マーチ家四姉妹の次女ジョーは、“I hate to think I’ve got to grow up, and be Miss March, and wear long gowns, and look as prim as a China Aster! It’s bad enough to be a girl, anyway, when I like boy’s games and work and manners! I can’t get over my disappointment in not being a boy”（12-13）と作中で叫ぶ。創造力と自由を求めるそれまでにないジョーの姿は、その後も多くの女性たちの心をとらえることになる。

だが、『若草物語』では、一方では長女のメグがジョーとは対極の存在として登場し、妻として母として家庭の中で生きる姿が丁寧な描かれていく。また、姉妹の母親であるマーチ夫人は、常に姉妹たちを見守り、夫に何かあれば献身

的に介護し、キリスト教的倫理観に基づき娘たちを良き妻や母へと育てあげる。その姿は、まさにフォスターの『コケット』において理想とされた母であり妻にはかならない。作者のオルコット自身は生涯独身であり、創作によって経済的な独立を獲得はしたが、その一生は家族のために多くを捧げたものであった<sup>6</sup>。この意味で、オルコット自身も、そして続編では結婚し家庭を持つジョーも、良き母親たれという理想から逃れることはできなかったのだ。

それは、19世紀末に出版され、いまやフェミニズム文学の先駆けとして高く評価されているケイト・ショパン（Kate Chopin 1850-1904）の『目覚め』（*The Awakening* 1899）においても受け継がれることになる。ヒロインのエドナ・ポンテリエは、20世紀後半の第二次女性運動を牽引したベティ・フリーダン（Betty Friedan 1921-2006）の『女性らしさの神話』（*The Feminine Mystique* 1963）を先取りするかのように、何不自由ない生活を送りながらもぼんやりとした不安を抱えて生きている。その彼女が自らの身体性と個人としての存在価値に気が付き、夫や社会的慣習に抵抗していく姿が、ラティニョール夫人という理想的な母親であり妻である女性と対比して描かれていく。

ここで注目したいのが、そのような新しい女性の象徴ともいえるべきエドナの描かれ方である。エドナは、精神的にも身体的にも独立を試み、女性らしさの規範を逸脱し転覆する存在だ。夫や周囲が求める上流階級の妻としての役割を拒否し、さらには家を出て一人で暮らしはじめる。夫の意のままとなる身体であることを否定し、自分の力で自由に泳ぎ、夫以外の男性との身体的な関係も結ぶ。作品の最後の場面において、自らの力で沖へと波の合間を泳ぎ続ける姿には、生まれたての“some new-born creature”（654）のような新しさと強ささえある。

だが、一方で気付かされるのは、そのような逸脱を可能としているのが、エドナの身体と精神が備えた健全さということだ。もちろん、最も理想的な母親としての身体と精神を備えていると描かれるのが、ラティニョール夫人である。

There are no words to describe her save the old ones that have served so often to picture the bygone heroine of romance and the fair lady of our dreams. There was nothing subtle or hidden about her charms; her beauty was all there, flaming and apparent: the spun-gold hair that comb nor confining pin could restrain; the blue eyes that were like nothing but sapphires; two lips that pouted, that were so red one could only think of cherries or some other delicious crimson fruit in looking at them. (529)

彼女は、幾人もの子供を産み、育て、そのような生き方に何ら疑問を抱かず、夫に常にかしずいている。そのような規範からエドナは逸脱しようとしているわけだが、だが、エドナ自身も、実はラティニョール夫人と同じ健全な身体を備えている。二人の男の子を産み育て、一人で泳ぐ能力もある。さらに言うならば、自ら書物を読み、考え、絵を描いて経済的に独立しようと模索するだけの精神的な強さをも備えているのだ。規範や慣習は否定しつつも、健康な男の子供たちを産み育て、自らの身体にも何ら不安のない白人女性であるエドナは、正しいギブソン・ガールにはなれなかったかもしれないが、その資格は十分に備えていた。

そのようなエドナの存在を際立たせているのが、独身のピアニスト、マドモアゼル・ライツの存在である。彼女はもう一人のエドナ、ひょっとしたらエドナがそうになっていたかもしれない未来の姿でもある。ピアノの演奏で生計を立て、質素ではあるが、一人で部屋を借りて暮らしている。好きな音楽の道を選び、誰にも邪魔されることなく自由に生きる姿は、20世紀後半の女性たちを先取りするかのようだ。だが、そのような彼女の姿は、作品内では醜く厭わしいものとして描かれる。

She was dragging a chair in and out of her room, and at intervals objecting to the crying of a baby, which a nurse in the adjoining cottage was endeavoring to put to sleep. She was a disagreeable little woman, no longer young, who had quarreled with almost every one, owing to a temper which was self-assertive and a disposition to trample upon the rights of others. (548)

赤ん坊の泣き声に文句をつけ、事あるごとに揉め事を起こす厄介な女性であるライツは、他の登場人物たちからは疎んじられ、蔑みの眼差しを向けられる。妻とも母ともならない彼女に、エドナやラティニョール夫人のような身体は与えられることはないのだ。

つまり、『目覚め』は新しい女性の目覚めを描きつつ、そこには母親としての身体的、精神的な健全さと正常さが秘かに前提とされていることをも明らかとした作品でもあるのだ。もちろん、それは、人種的、階級的な優越性をも示している。エドナは白人の上流階級の女性であり、エドナの周囲に影のように存在しさまざまな家事労働を担う混血の女性たちには、そのような逸脱は許されないのだから。



### 3. 20世紀に入って

『目覚め』における優生学思想的要素は、20世紀に入ってから発表された女性作家の作品にも受け継がれることになる。その代表的な作品の一つが、シャーロット・パーキンズ・ギルマン（Charlotte Perkins Gilman 1860-1938）の『ハーランド』（*Herland* 1915）だろう。19世紀終わりから多くの女性作家が描いた女性だけのユートピアは、当時の白人の女性たちが目標としたさまざまな社会改革を盛り込んだものであった<sup>7</sup>。ギルマンの『ハーランド』はその代表的な作品といえる。ギルマンが『女性と経済』（*Women and Economics* 1898）において主張した、女性が経済的に自立するために必要な教育が十分に与えられ、衛生的な居住環境と労働環境がハーランドには整っている。そこではすべての女性が等しく労働を分かち合い、それぞれの適正に合わせて職業につき、貧富の差もなく、したがって争いもない。

だが、ギルマン自身、優生学思想に強く影響を受けていたと指摘されているように<sup>8</sup>、『ハーランド』もその根幹に優生学を見出すことは難しくはない。ハーランドに生きる女性たちは、すべてみな同じような身体的特徴と高い精神性を備えた、いわば生物学的に優れた属性を持つ人々である。“Each was in the full bloom of rosy health, erect, serene, standing sure-footed and light as any pugilist” (351) と描写される彼女たちは、“... these people were of Aryan stock, and were once in contact with the best civilization of the old world” (386) という箇所が端的に示すように、優生学思想において生存適者であるとされた白人たちである。さらには、作品中に病や障害<sup>9</sup>に苦しむ人々や、精神的なストレスや不安を抱えた人々が登場することもない。

そもそも、パトリック・パリンダーが“... a utopia must be, at the very least, a place of enhanced physical well-being”であり、“... utopian happiness demands the enjoyment of a better overall standard of health and welfare than any previous society has known” (67) と指摘するように、理想の社会に暮らす人々は、身体的にも精神的にもアクチュアルな社会の人々より優れていなければならないというのが、多くのユートピア文学に共通する前提であった。病も障害も消滅しているはずだという仮定が、優生学へと通じるのはたやすいことだ。ユートピア思想と優生学の親和性を証明するかのように、前述した、優生学という用語を生み出したフランシス・ゴルトン自身、ユートピアに深い関心を抱き、出版されることはなかったものの晩年にはユートピア小説の執筆を試みていた（Parrinder 68-69）。したがって、ギルマンが想定したユートピアにおいて、優生学思想的に適者ではないと見なされる人々が存在しないのは当然のことと言えよう。

この作品のさらに注目すべき点は、このような優生学思想が、共和国から続く理念——妻として母としての理想の女性像と分かちがたく結びついてしまっていることだろう。女性だけのユートピア社会を支えている一つの理念が、優れた母親となること、生まれてくる娘たちを次世代の母となるように心身ともに健康に育てるというものであった。そもそも、ハーランドは、長い歴史の果てに生まれた国と設定されている。戦争や自然災害によって外界から孤立し、女性だけで生きていくことになった女性たちは、いつしか単性生殖により女の子のみ出産が可能となる。安定した社会を築くまで多くの苦難を乗り越える彼女たちを一つに束ねたのが、健康で優れた女の子供を産み育てるという目標であったのだ。つまり、この国は、すべての女性たちが、母となり子供を育てるための最適な環境を作ることのみを目指した社会であったのである。いわば、『コケット』において示された共和国の母という理念が、時代を隔てて残り続け、極度に理想化されて姿を現したとさえいえるのかもしれない。自分たちは“Conscious Makers of People”（400）なのだと語るハーランドの女性の言葉の裏には、18世紀末に出版された『コケット』の“the public weal”という言葉が潜んでいる。母であることの意義がすなわち国家の発展と安寧へとつながっているのは変わっていないのだ。

それを実証するかのように、ハーランドという国家を守るために、女性たちは“negative eugenics”の実施さえためらわなかった歴史が語られる。

There followed a period of “negative Eugenics” which must have been an appalling sacrifice. We are commonly willing to “lay down our lives” for our country, but they had to forgo Motherhood for their country—and it was precisely the hardest thing for them to do. (401)

子供を産み育てることを何よりの優先事項とし、そのために生きている彼女たちだが、人口の増加により食料が不足し社会が混乱するおそれのあった時代には、人口を抑制するために妊娠を一定期間控えることを選んだ。妊娠と出産という個人的な選択であり行為であるものが、国家のため、管理の対象となる——まさに、後述するマーガレット・サンガーが優生学に基づいて提唱した家族計画を彷彿とさせる。

さらに、母親になることを拒絶する女性たちは矯正させられ、ハーランドに不適格な子供が生まれることがないように管理される。ハーランドに迷い込んだ白人の男性の一人が、ハーランドの女性に、生まれてくる娘たちに障害などの問題はないのかと問いかける場面がある。すると、彼女は次のように答える



のだ。

“When we began—even with the start of one particularly noble mother—we inherited the characteristics of a long race-record behind her. And they cropped out from time to time—alarmingly. But it is—yes, quite six hundred years since we have had what you call a ‘criminal.’

“We have, of course, made it our first business to train out, to breed out, when possible, the lowest types.” (414)

驚いた男性が、どのようにして“breed out”するのか尋ねると、彼女は“If the girl showing the bad qualities had still the power to appreciate social duty, we appealed to her, by that, to renounce motherhood”と答える (414)。それでも娘を持つ権利を行使する女性がいて同じような娘が生まれてくる場合にはどうするのかとさらに問いかけられると、彼女は“That we never allowed” (414) と静かに答えるのである。作品では、どのようにして妊娠と出産が許されないのか、矯正が可能な女性たちがどうなるのかについて語られることはない。だが、男性たちが、心身ともに健全な女性たち以外の姿を見ることがなかったという事実が、彼女たちの末路をほのめかすには十分だろう。ハーランドとは、ハーランドにとってふさわしい娘——白人で、障害や病を持たず、理想の母となるという理念を共有できる女性のみが、生きることを認められる社会であったのだ。

ギルマンより一世代若く、同じく女性の権利と地位の拡大を目指しつつも、優生学に共鳴し、その思想を自らの作品に取り込んでいったもう一人の女性作家が、『あしながおじさん』(*Daddy-Long-Legs* 1912) で知られるジーン・ウェブスター (Jean Webster 1876-1916) である。『あしながおじさん』でギブソン・ガールの典型といえる女子大生を登場させ、一躍有名となったウェブスターだが、その続編『大嫌いなあなたへ』(*Dear Enemy* 1915) には、優生学思想が色濃く影を落としていることは意外と知られていない。二つの作品を検証すると、ギブソン・ガールたちが共和国の母という理念を引き継ぎ、優生学思想に共鳴する過程が浮かび上がる。

『あしながおじさん』は、19世紀後半における女性のための高等教育機関の相次ぐ設立と、それによる女性の社会進出の流れを反映している作品である。孤児であるひとりの少女が成長していく物語は、19世紀の家庭小説の流れを受け継ぐものだが、女子大学における教育によって、経済的にも精神的にも独立していくヒロインの姿は、新しい女性の台頭を象徴するかのようだ。ヒロインのジュディ (ジルーシャ)・アボットは、孤児院で惨めな生活を送っていたが、

孤児院の理事の一人である裕福なとある紳士に文才を認められる。あしながおじさんとあだ名をつけたその紳士の援助を得て、ジュディは名門の女子大学で優れた教育を受け、才能を開花させる。作者ウェブスター自身が学んだヴァッサー大学をモデルとする大学での教育によって自分の才能を伸ばし、その力によって独りで生きていこうとするジュディの姿は、まさにギブソン・ガールの典型といえるだろう。ジュディは独立心に富み、大学生生活が続けるうえで必要以上の支援をあしながおじさんから受けることは拒み続ける。さらには、執筆によって収入を得るようになると、それまで受けてきた支援の返済まで試みるのだ。経済的自立を目指すジュディの姿は、ギルマンが『女性と経済』や『ハーランド』において唱えた理想と重なり合うものがある。孤児の少女が裕福な紳士に見初められ結ばれるという物語は、シンデレラ・ストーリーの一種ではあるが、さまざまな因習や慣習に疑問を唱え、自ら考え、己の力によって経済的な自立を目指すジュディは、19世紀の『若草物語』のジョー・マーチの未来の姿といえるのかもしれない。

だが、続編『大嫌いなあなたへ』では、ジュディが作家として活躍する姿が描かれることはない。大学在学中はさまざまな未来の計画や希望にあふれ、創作に打ち込んでいたはずのジュディは、いまやあしながおじさんの妻として、夫に付き従って海外に赴き、子供を育てる日々を過ごしている。慈善事業にも携わってはいるようだが、作家としてのジュディの姿を見出すことはできない。もちろん、作者のウェブスターが、若くしてこの世を去ることなく執筆活動を続けていたならば、ジュディの異なる姿に出会うことができたのかもしれない。だが、読者に残されたのは、ジュディの唐突な変貌と、優生学思想が作品の基盤となっている『大嫌いなあなたへ』のみのものだ。

『大嫌いなあなたへ』において主人公となるのが、ジュディの大学時代の友人、サリー・マクブライドだ。裕福な家に生まれ育ったサリーは、ジュディが育った孤児院の学院長となることをジュディに頼まれ、最初は抵抗しつつも、やがて孤児院の運営と改革に夢中になっていく。女子大学で学んだ知識を生かし、孤児院を変えていく姿から、サリーもジュディと同じく典型的なギブソン・ガールの一人であるといえるだろう。だが、『あしながおじさん』では前面に押し出されることはなかった優生学思想が、『大嫌いなあなたへ』においては、二つの側面からはっきりと浮かび上がる。一つが、サリーの孤児院の運営方法であり、もう一つが、サリーと医師ロビン・マックレイとの関係である。

孤児院の改革に乗り出したサリーは、子供たちが心身ともに健康に育つようにさまざまな方法を取り入れていく。そして、ジュディから聞かされていたような淋しく辛い生活ではなく、温かい家庭と同じ環境を子供たちに与えようと

苦戦する。何よりサリーが目指したのは、子供たちの“Initiative, responsibility, curiosity, inventiveness” (224) を育むことを目指す教育であった。だが、その一方で、サリーが子供たちを評価し判断する視線には、優生学的な要素がにじみ出る。サリーは子供たちが良い家庭に養子として迎えてもらえるように、“We need a field worker to travel about the country and pick up all the hereditary statistics she can about our chick” (149) と述べる。統計学的に家系の遺伝を調べ、優生学的にみて健全な家系の子供であるという確証が得られれば、養子縁組を成立させることが容易となるというのだ。

さらに、サリーは、さまざまな障害がある子供たちは、次のように他の施設へと送ってしまう。

Five other children have been sent to their proper institutions. One of them is deaf, one an epileptic, and the other three approaching idiocy. None of them ought ever to have been accepted here. This is an educational institution, and we can't waste our valuable plant in caring for defectives. (168)

最後の“we can't waste our valuable plant in caring for defectives”という一文からは、障害を抱える子供たちと健全とされる子供たちをサリーが明確に差別していることがわかる。もちろんサリーは、家系に問題があったとしても、環境によって子供たちを矯正することができるのではないかと考えもするが、それでも知的障害が疑われる子供や、アルコール摂取障害を抱える父親の元に生まれた子供がアルコールで問題を起こすと、やはり遺伝を変えることはできないと思ってしまう。サリーが孤児院の子供たちに寄せる愛情には、健全であるか、障害があるか、という要素が大きく関わっているのである。

そして、そのようなサリーの考えを支えるのが、優生学思想なのだ。孤児院の子供たちの診察や治療を担う医師マックレイは、まだ若く経験のないサリーに、孤児院の子供たちを育てるのに必要なさまざまな知識を教えようとする。サリーは、自分に必要な知識はマックレイによれば、“A person in my position ought to be well read in physiology, biology, psychology, and eugenics; she should know the hereditary effects of insanity, idiocy, and alcohol; should be able to administer the Binet test; . . .” (189) と語る。さまざまな分野に加えて、優生学と遺伝に関する知識が強調されていることがわかるだろう。ここでいう“Binet test”とは、フランスの心理学者が開発した知能テストであり、1912年にはエリス島で移民たちに対してこのテストが実施されるなど、アメリカ社会において優生学に基づき社会に適しているかどうかを判断するにあたって採用されるようになって

いた (Ordovery 11)。つまり、マックレイは、サリーのような立場の人間は優生学に関する基本的な知識を身に付け、知能テストを正しく行えるようにすべきだというのだ。

そして、マックレイの指導のもと、サリーは当時の優生学思想を代表するような書物をさらに読み進めていく。

We devoted last week to the life and letters of the Jukes Family. Margaret, the mother of criminals, six generations ago, founded a prolific line, and her progeny, mostly in jail, now numbers some twelve hundred. Moral: watch the children with a bad heredity so carefully that none of them can ever have any excuse for growing up into Jukeses. (189)

ジューク一族とは、リチャード・ダグデイル (Richard Dugdale) が1877年に出版した *The Jukes* で一躍知られるようになった家系である。ヘンリー・H・ゴッダード (Henry H. Goddard) が出版した *The Kallikak Family* (1912) と共に、犯罪者や障害者が頻出する家系をたどり、社会にとって適切ではない資質を持つ人々を遺伝と関連づけて警鐘を鳴らし、社会に大きな衝撃を与えた書物であった (Dowbiggin 74-75, 101)。

マックレイの指導のもと、優生学に関する知識を吸収していくサリーは、孤児院の子供たちの処遇や未来について思いを巡らせる中で、特に知的な障害を持つ子供たちについて頭を悩ませるようになっていく。

It seems that feeble-mindedness is a very hereditary quality, and science isn't able to overcome it. No operation has been discovered for introducing brains into the head of a child who didn't start with them. And the child grows up with, say, a nine-year brain in a thirty-year body, and becomes an easy tool for any criminal he meets. Our prisons are one-third full of feeble-minded convicts. Society ought to segregate them on feeble-minded farms, where they can earn their living in peaceful menial pursuits, and not have children. Then in a generation or so we might be able to wipe them out. (198)

“in a generation or so we might be able to wipe them out”という知的障害者に対する差別的な姿勢は、実はこの時代のアメリカ社会においては優勢となっているものであった。“... by the 1890s the overwhelming consensus among physicians was that feeble-mindedness was hereditary and constituted a distinct menace to society”

(Dowbiggin 74) という認識が広まり、“the most prominent eugenics issue at the time”となっていたのである (Dowbiggin 101)。やがて、この認識は、知的障害者の隔離だけではなく、結婚の禁止や強制不妊手術へとつながっていく<sup>10</sup>。このような当時の社会的情勢を踏まえるならば、孤児の一人についてこうサリーが述べるのも、当時の風潮を適切に映し出したものといえるだろう。

I've diagnosed her case; she's a Kallikak. Is it right to let her grow up and found a line of 378 feeble-minded people for society to care for? Oh dear! I do hate to poison the child, but what can I do? (199)

ここで注意しておきたいのは、そのようなサリーの姿にも、『コケット』から『ハーランド』へと続く共和国の母の理念が浮かび上がるということだろう。いつしか孤児院の運営に全身全霊で取り組むようになっていったサリーは、作品の終わりの方で、“I really do love this work; I go about planning and planning their baby futures, feeling that I'm constructing the nation”と述べるのだ(304)。“I'm constructing the nation”という言葉は、孤児院の子供たちの母として、子供たちを優生学に基づき適切に区分し、心身ともに健全に育てあげることが、一つの国を築く行いと等しいものとされていることを示す。ギブスン・ガールであったサリーが選ぶ道は、母として一つの国である孤児院を正しく築くことであったのだ。

もう一つ、この作品における優生学の影響を見て取ることができるのが、サリーと医師マックレイの関係である。最初は意見が合わず衝突を繰り返しながらも次第に惹かれ合っていく二人であったが、二人の関係を阻害する要因が一つあった。マックレイにはすでに妻子があり、その妻は精神的な病のため療養所に暮らしていたのである。また、マックレイの娘にも何らかの障害があることがほのめかされる。もちろん、作品の最後では、その妻は都合よくこの世を去り、無事にサリーとマックレイは結ばれる。注目すべきは、そのようなマックレイの妻と娘に対して、サリーが何ら同情や共感を寄せることがなく、サリーの思いはもっぱらそのような妻を持ったことで苦しむマックレイに向けられることだろう。“The poor man for years and years has undergone a terrible strain, and I fancy her death is a blessed relief” (344)、“Just think of all that tragedy looming over our poor patient good doctor” (344) とサリーはマックレイを思い労わるが、病を抱えた妻やその死に対して、何らかの哀れみや共感といった感情を示すことはまったくない。娘に対するマックレイの愛情が深いものであることを示すエピソードはあるが、結末においてその娘の行く末をサリーが語ることはない。

優生学的視点からすれば、病を持ち社会に適した存在でないとされた妻が、作品からも、サリーの心からも切り捨てられる存在でしかないのは当然のことであつたのだ。

実は、このマックレイとその妻との関係については、作者ウェブスター自身の経験が大きく反映されたものであつた。ウェブスターは、親友の兄であつたグレン・フォード・マッキニイ（Glenn Ford McKinney）と恋に落ちるが、そのとき彼にはすでに妻子があり、妻は精神的な病を抱えていた。長らく不倫関係を二人は続けるが、やがてマッキニイ夫妻の離婚が成立し、1915年9月にジーン・ウェブスターとグレン・フォード・マッキニイはひっそりと結婚式を挙げることになる<sup>11</sup>。結婚の翌年、ウェブスターは娘を出産したのち命を落としてしまう。したがって、ジュディやサリーのその先の未来は、描かれることはなかった。1920年代に入り、フラッパーと呼ばれるさらなる新しい女性たちが出現し、女性参政権が認められる社会になったとき、ウェブスターが果たしてどのような女性たちを描いていたのか、それはわからぬままとなつてしまつたのであつた。

#### 4. 彼女たちの未来

19世紀末に誕生したギブソン・ガールたちは、新たな女性のさらに輝く未来を期待させる存在であつた。しかしながら、その身体と精神は、共和国時代から続く母の理念と優生学思想を帯びるものであつた。そのような姿は、本稿においてたどつた女性作家たちの作品だけではなく、実際に活躍した活動家の姿にも見て取ることができる。それは、優生学と母であることの理念を最も先鋭化した形で結びつけた、産児制限運動で名高いマーガレット・サンガー（Margaret Sanger 1879-1966）である。女性が妊娠と出産に関する選択権を持つことを主張したサンガーは、産児制限運動による女性の解放を目指した。だが、一方で、その思想の根幹には優生学思想があり、特定の階層や集団を隔離し強制不妊手術を施すことで、優生学的に適した子供を増やし、そうではない子供の数を減らす必要性を主張したのである<sup>12</sup>。健全とされる心身を備えた白人の女性たちが、適切な母となり、適切に子供を育てられる環境を整備する必要性を説くサンガーの主張は、ギルマンやウェブスターの思想と重なり合う。そこには、多様な人種や民族、階級を受け入れようとする姿勢も、社会に適していないと一方的に判断された者たちへの視線もない。サンガーもギルマンも、女性が理想の母となるにはどうすれば良いのか、社会はどう変わるべきかいうことを追求し続けた。その思想は、女性の権利の拡大を目指してはいたが、優生学と呼応し、母となり子供を育てられる健全な心身を備えた白人の女性を究極の目標とする



ことで、共和国時代から続く理念を温存するものであった。したがって、それは本質的には女性の選択肢を多様化することにも拡大化することにもつながらなかったのである。

ギブソン・ガールたちが、共和国の母の理念から解放され、多様で豊かな個性を獲得するには、ウェブスターからさらに半世紀以上の年月が必要であった。20世紀後半から21世紀にかけてのギブソン・ガールの変化については稿を改めることとしたいが、例えば、アーシュラ・K・ルグイン (Ursula K. Le Guin 1929-2018) の作品には、さまざまな出自を持ち、多様な身体と精神を備える女性たちが登場する。ルグインの描く架空の世界アースシーを舞台とする『帰還』(Tehanu 1990) においては、障害を持つ女性が最も強き者となる。さらに、多様な人々が共存し、社会に適した/適していないという区分のない『オールウェイズ・カミングホーム』(Always Coming Home 1985) においては、母であることの理念や女性らしさの規範が新たなものへと生まれ変わっていることに気付かされる。その背景には、ギルマンやウェブスターからルグインにいたる50年以上の間にアメリカ社会に起こった優生学思想への対応の変化と、女性運動の多様化があることはいうまでもない。いまや、*Life*や*Time*といった雑誌の表紙を飾るのは、さまざまな出自のさまざまな身体を備えた女性たちだ。もはや彼女たちには、ギブソン・ガールという呼称はふさわしくない。それぞれの名まえと個性を持つ女性たちとなっているのだから。

## 注

- 1 ギブソン・ガールの登場と特徴、果たした役割については、Patterson 28-37を参照。
- 2 Eugenicsとは、ギリシア語で“well”と“born”という意味の二つの語を結びつけたもの。Black 16を参照。
- 3 ゴルトンの経歴と思想については、Black 13-19を参照。
- 4 Black 21-41を参照。アメリカにおける優生学の受容については、Hofstadter 161-67、Dowbiggin 73-75も参照のこと。
- 5 DavidsonのChapter 4を参照。
- 6 Matteson 292-98を参照。
- 7 19世紀終わりから20世紀初頭にかけてのアメリカ女性作家によるユートピア作品については、Kolmertenを参照。
- 8 Golden 49-52を参照。
- 9 「障害」の日本語表記については、令和3年3月12日付の文化審議会国語分科

会による報告書『『障害』の表記に関する国語分科会の考え方』(<https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/kokugo/hokoku/>)を参照した。この報告書では、「障害」の表記について、引き続き検討すべき事柄として結論を出してはいないが、「障害者自身は『差し障り』や『害悪』をもたらし存在ではなく、社会にある多くの障害物や障壁こそが『障害者』をつくりだしてきた。このように社会に存在する障害物や障壁を解消することが必要である。このような社会モデルの考え方と条文では、『Persons with Disabilities』と表記していることから、現段階では『障害』の表記を採用することが適当である」(9) という箇所から判断するに、本稿では「障害」という表記を用いるのが論の流れに適当であると考え、「障害」という表記を用いることとしたい。

- 10 この流れは、Black 87-123に詳しい。
- 11 Simpson 107-121, 180-185を参照。
- 12 サンガーの思想と優生学との関わりについては、Weingarten 52-65を参照。

#### 引用文献

- Alcott, Louisa May. *Little Women or Meg, Jo, Beth and Amy*. 1868. Edited by Anne K. Phillips, W. W. Norton, 2004.
- Black, Edwin. *War Against The Weak: Eugenics and America's Campaign to Create a Master Race*. Four Walls Eight Windows, 2003.
- Chopin, Kate. *The Awakening*. 1899. *Kate Chopin: Complete Novels and Stories*. Edited by Sandra M. Gilbert, Library of America, 2002.
- Davidson, Cathy N. *Revolution and the Word: The Rise of the Novel in America*. 1986. Expanded Edition, Oxford UP, 2004.
- Dowbiggin, Ian Robert. *Keeping America Sane: Psychiatry and Eugenics in the United States and Canada, 1880-1940*. Cornell UP, 1997.
- Foster, Hannah Webster. *The Coquette; Or, the History of Eliza Wharton; A Novel; Founded on Fact*. 1797. *The Power of Sympathy and The Coquette*. Penguin, 1996.
- Gibson, Charles Dana. *The Gibson Girl and Her America*. 1969. Selected by Edmund Vincent Gillon, Jr., Dover Publications, 2010.
- Gilman, Charlotte Perkins. *Herland*. 1915. *Charlotte Perkins Gilman: Novels, Stories & Poems*. Edited by Alfred Bendixen, Library of America, 2022.
- . *Women and Economics*. 1898. Dover, 1998.
- Golden, Catherine J. "Looking Backward: Rereading Gilman in the Early Twenty-First Century." *Charlotte Perkins Gilman: New Texts, New Contexts*. Edited by Jennifer S. Tuttle and Carol Farley Kessler, The Ohio State UP, 2011. pp. 44-65.
- Hofstadter, Richard. *Social Darwinism in American Thought*. 1944. With a New Introduction by Eric Foner, Beacon Press, 1992.

- Kolmerten, Carol A. "Texts and Contexts: American Women Envision Utopia, 1890-1920." *Utopian and Science Fiction by Women: Worlds of Difference*. Edited by Jane L. Donawerth and Carol A. Kolmerten, Syracuse UP, 1994. pp. 107-25.
- Le Guin, Ursula K. *Always Coming Home*. 1985. Edited by Brian Attebery, Library of America, 2019.
- . *Tehanu*. 1990. *The Books of Earthsea: The Complete Illustrated Edition*. Saga Press, 2018.
- Matteson, John. *Eden's Outcasts: The Story of Louisa May Alcott and Her Father*. W. W. Norton, 2007.
- Ordovery, Nancy. *American Eugenics: Race, Queer Anatomy, and the Science of Nationalism*. U of Minnesota P, 2003.
- Parrinder, Patrick. *Utopian Literature and Science: From the Scientific Revolution to Brave New World and Beyond*. Palgrave, 2015.
- Patterson, Marth H. *Beyond the Gibson Girl: Reimagining the American New Woman, 1895-1915*. U of Illinois P, 2005.
- Simpson, Alan and Mary. *Jean Webster: Storyteller*. With Ralph Connor, Tymor Associates, 1984.
- Webster, Jean. *Daddy-Long-Legs and Dear Enemy*. Edited by Elaine Showalter, Penguin, 2004.
- Weingarten, Karen. *Abortion in the American Imagination: Before Life and Choice, 1880-1940*. Rutgers UP, 2014.
- 田辺千景 「解説 見知らぬ人たちの涙」『コケット あるいはエライザ・ウォー  
ンの物語』松柏社、2017年。

＊本稿は、科学研究費助成事業、基盤研究C「アメリカ女性作家にみる性差と身体  
の表象の系譜—ケイト・ショパンの作品を中心に」(2019-2023年度、課題番号：  
19K00455) の助成を受けた研究成果の一部である。